

# The Man with Five Faces



本多光太郎 5つの顔を持つ男

公益財団法人本多記念会  
東北大学金属材料研究所

The Honda Memorial Foundation  
Institute for Materials Research, Tohoku University

# The Man with Five Faces

その男、  
5つの顔を持つ。

ある時は目を見張るような成果を産み出すイノベーター。

ある時は多くの研究者を組織するオーガナイザー。

ある時は赤子のような無邪気さを持つバーバリアン。

ある時は豊富な学識経験とスキルを誇るアルチザン。

そして、ある時はおびただし数の後進を育て上げていくインストラクター……

本多光太郎は5つの特徴を持つ偉大な研究者だった。

愛知県西三河・岡崎の地に生まれ、学術への志を胸に東京帝大にて物理学を究め、

東北帝大では「鉄の神様」とまで呼ばれるようになった男。

金属材料研究所を設立し、世界の金属工学をリードしていった男。

そんな本多光太郎にまつわる様々なエピソードをご紹介します。

本多光太郎（ほんだ・こうたろう）

1870年2月23日、  
愛知県碧海郡矢作町字新堀大庭  
（現・愛知県岡崎市）生まれ。

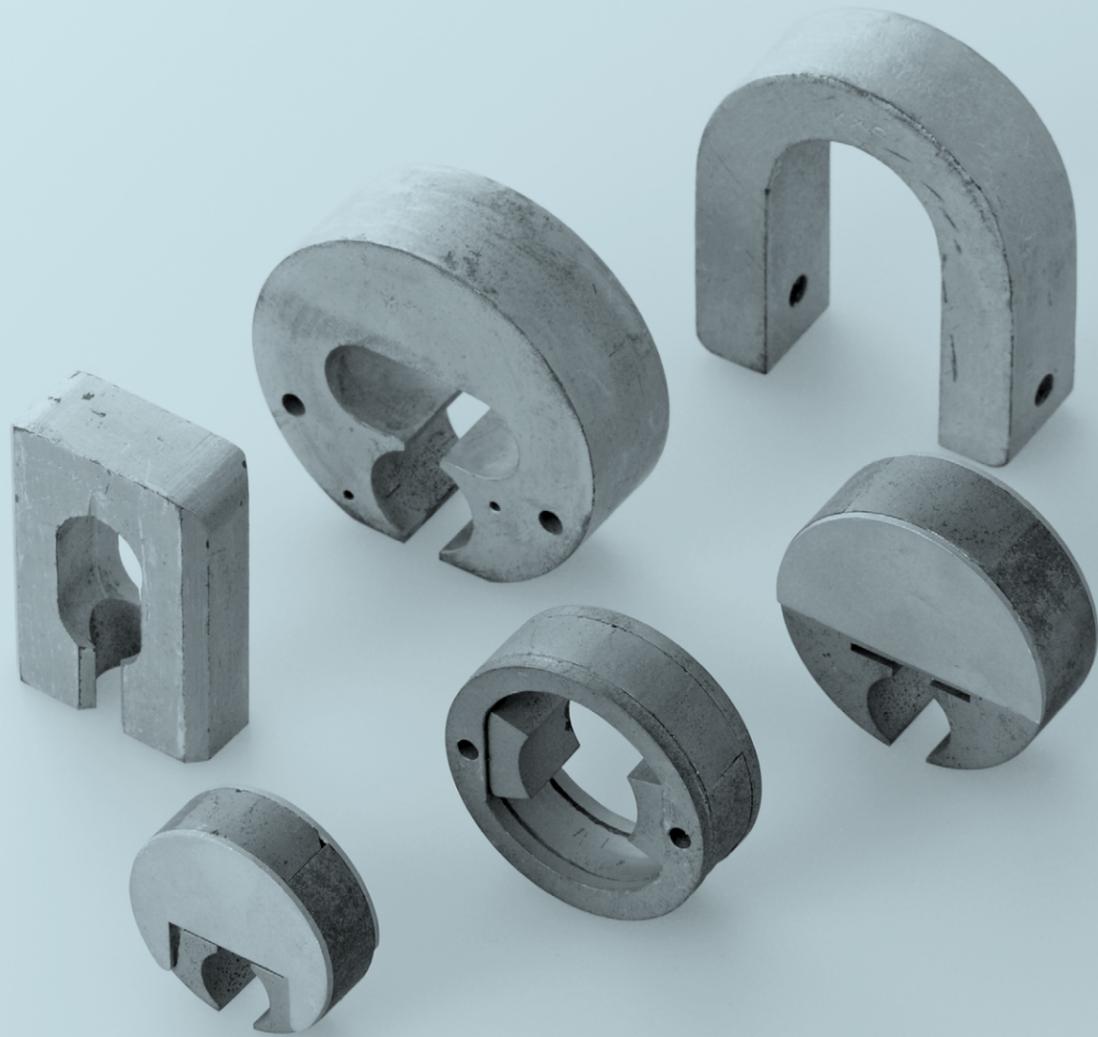
日本を代表する物理学者・金属工学者。

東北帝国大学金属材料研究所の産みの親であり、  
後に東北帝国大学総長も務めた。

1954年2月12日没。

## アカデミアのみならず産業界にまで「革新」の風を送り続けた男

KS磁石鋼、新KS磁石鋼、熱天秤……本多光太郎の最大の特徴は多くの研究成果を産み出しただけでなく、それらを社会に結びつけていった点にある。  
本多の軌跡を辿れば、学術の世界に閉じ込められなかった学者の姿が浮かび上がってくる。



KS磁石鋼（後列）、新KS磁石鋼（前列）

### 磁気分析法開発と網羅的実験

すべてのパターンを漏れなくやり尽くす  
詳細な実験がイノベーターの証

本多光太郎はドイツ留学の最後の年、ベルリン大学のデュボアのもと、1年間で43種の元素の帯磁率の測定を行った。元素の磁氣的周期性を示すその結果は、詳細な実験スタイルとともに、当時の研究者を大いに驚かせ、本多の名を世界に知らしめた。帰国後、東北大学に赴任した本多は数名の弟子たちと、ドイツで手に入れた炭素鋼をもとに、炭素鋼、タングステン鋼、クロム鋼、高速度鋼、磁石鋼などの特殊鋼のそれぞれの濃度を変えた詳細な状態図を作成することにパワーを注ぎ込んだ。組成や温度を細かく設定した、詳細にして網羅的な「熱及び磁気分析の実験」は、その後の本多スクールの特徴的な研究手法となっていく。その手法を駆使して、本多とその弟子たちは数々の新しい金属材料を生み、日本の鉄鋼産業を発展させていった。

### KS磁石鋼

従来の3倍の磁力を持つ世界最強の磁石を開発

大正5(1916)年、本多とその弟子、高木弘は、陸海軍の依頼により(当時としては)世界最強の磁石『KS磁石鋼』を開発した。研究費を寄附した住友吉左衛門(住友財閥代表)の名からKSと名付けられたこの磁石鋼は、鉄、コバルト、タングステン、クロム、炭素等をもっとも磁力を保有する割合で配合して作られた合金であった。その強さは、磁石の強さを表す保磁力にして従来の永久磁石の3倍にもなった。様々な元素を鉄と配合する特殊鋼づくりを本多から命じられた高木は多くの組み合わせや配合量を試行錯誤しながらテストピースを作っていた。狭い部屋で一千数百度の温度の溶解作業をすることは大変な暑さに耐えながら行う苦しい仕事であったため、本多の提案で高木は消防士服を着て作業をしたそうだ。苦勞して完成したKS磁石鋼は住友金属により発売されたが、肝心の陸海軍では、磁力が強過ぎて利用することができなかったとのこと。KS磁石鋼は以後15年間、世界最強の磁石として君臨したが、昭和6(1931)年に東京帝国大学三島徳七研究室が、KS磁石鋼の2倍の保磁力を有する『MK磁石鋼』を開発した。本多とその門下の人々はMK磁石鋼の出現に大層驚き、わずかその2年後、本多と増本量・白川勇記がMK磁石鋼を上まわる『新KS磁石鋼』を開発したのだった。

### 熱天秤

本多が作った研究装置

本多は同志や門下の人々とともに、独自の研究装置をたくさん作っていた。その中で特に目をひくのが「熱天秤」。物質を熱して温度変化を与えると質量(重さ)が変化する。この「温度による質量変化」を測るために発明されたのが本多式熱天秤である。熱天秤は、天秤の片方に試料(重さを調べたい物質)を載せ、もう片方には決められた重さの分銅を載せる構造になっていた。この試料を載せたほうを炉の中に入れて熱すると、重さに変化が生じ、時間経過とともに天秤の傾きが変わっていくのだ。本多はこの熱天秤を使って硫酸マンガ、硫酸カルシウム、炭酸カルシウム、酸化クロムなどの「温度による質量変化」をグラフにし、世に示していった。熱天秤は、その後、仙台の会社で製造・販売され、世界の学界や工業界に強い関心を呼び起こし、様々な改良が加えられて現在に至っている。

### 切れ味試験機

鍛冶屋さんとの交流から始まった  
刃物の切れ味の測定マシン開発

ある時、本多は和歌山の鍛冶屋さんから「自分が考案した刃物の製造方法と堺に伝わる製造方法の利点を比較してほしい」という相談を受けた。これにていねいに回答したことから鍛冶屋さんとの交流が始まり、やがて、刃物の「切れ味試験機」を考案。引き切り式で、切れた紙の枚数から刃物の切れ味を数値として測る世界初のものであった。この方式は現在でも幅広く使用されている。



本多式切れ味試験機

# ORGANIZER

組織者の顔

## 人々をつなぎ、組織を作り、「聖地」と呼ばれるまでに育て上げていった男

本多光太郎のカリスマ性、求心力は多くの人々を惹きつけた。

実際、自らを慕う人々を結集し、材料科学の未来を担う研究組織をオーガナイズしていく。

彼は様々な人を結ぶハブとして機能することを自らに課していたに違いない。

### 金研の創成

材料科学を導き、世界の中心たる組織を創り上げる

大正4(1915)年、本多光太郎は東北帝大第二代総長、北條時敬に、鉄鋼などの研究に専従する臨時理化学研究所第二部の創設を提案した。本多の熱意にほだされた北條総長は、文部省に話を通し、さらに足りない資金は住友財閥に働きかけて寄附を得て、大正5(1916)年に東北帝国大学臨時理化学研究所第二部が設立された。そして、第二部設立の年、本多は弟子とともにKS磁石鋼という大発明を世に送り出した。この大発明によって本多に対する学界、官界、産業界の評価は一気に高まっていった。その後、本多は第三代総長、福原謙二郎を動かして文部省に働きかけ、大正8(1919)年、臨時理化学研究所第二部を大学に附属した鉄鋼研究所へと昇格させた。この後、東北帝大鉄鋼研究所は、まさに鉄鋼学、物理冶金学の王道を歩むこととなる。全国の大学から研究者が集うことはもちろん、鉄鋼・造船・機械などの大会社から多くの若手技師たちが、また、陸海軍からも多数の研究生が、鉄鋼研究所に派遣された。当時、「鉄研の実験室に外から割り込むことは銀座通りに間口を持つことよりも難事である」と言われていたという。大正11(1922)年、鉄鋼研究所は金属材料研究所と改称して、東北帝大に附置された独立の研究所となった。大正、昭和、平成を経て現在まで脈々と続く東北大金研(KINKEN)の輝かしい歴史はこの時に始まったのである。

### 金研と金属工学科

金属工学科の開設によって金研との両輪を成す

本多は大正12(1923)年の東北帝大工学部金属工学科の設置にもきわめて強い情熱を注いだ。当初、文部省は東北大学工学部に「冶金科」を置く予定だったが、本多は学科名を「金属工学科」とすることを強く主張。ついにはその学科名を承認させた。彼の頭の中では教育を担う金属工学科と研究を担う金研を両輪として成り立たせ、金属工学を確立させたいという思いがあったに違いない。

### 総長になっても金研

所長の上に本多先生欄を設けた稟議書

昭和6(1931)年、本多は第6代東北帝大総長に就任した。本多総長は各部局に関する大抵のことは学部長の意見に同意した。しかし、金研では所長時代と変わらなかった。事務的なことは石原寅次郎所長に任せつつ研究に関しては「どうだん(本多の出身地岡崎・三河弁の口癖)」と言って毎日各研究室を回って歩いていた。また、設備拡張や人事など重要事項は所長決裁だけでは決められず、必ず本多の意見をうかがう必要があった。金研事務部では、稟議書の所長決裁印の欄の上に本多先生印の欄を設けたほどであった。

### 本多式交渉術

タフなネゴシエーションで大学組織を発展させていった男

東北帝大総長時代の本多は、大学を発展させるための予算を実にタフな交渉によって文部省から勝ち得ていた。通常、大学の学長が予算交渉を行う相手は大臣、次官、局長までだが、本多の場合は課長、係長にまで頼みに行く徹底ぶり。課長の横の小椅子に座り込んで「この計画が大学にとっていかに大切な計画であるか」、「その実現によって社会や国にどれだけの恩恵をもたらすか」を延々と説明し続ける。「鉄の神様」と呼ばれる世界的な研究者であり、帝国大学総長でもある人物が身を低くして説明をする様に、ついには文部省も兜を脱いで、一旦はご破算となっていた予算を復活させることが何度もあった。偉大なるオーガナイザーは有能なネゴシエーターでもあったのである。



アルベルト・アインシュタインと物理学教授陣  
(左から本多光太郎、アインシュタイン、愛知敬一、日下部二郎太)

# BARBARIAN

野生児の顔

## 「鉄の神様」の素顔の魅力は野生児としての泥臭さと微笑ましさ

鉄の神様と呼ばれ、東北帝大総長にまで上り詰めた本多光太郎の素顔は、無邪気にして泥臭い「野生児」であった。

その性格を物語る逸話の数々。

本多を慕う周囲の人々は、彼を「人間・本多光太郎」として愛していたに違いない。

### はなたらしの光さん

身体が大きく、のっそりした印象だった子供時代

東京帝大を卒業し、後に東北帝大総長にまでなった本多光太郎は、最初からエリートだったわけではなかった。子供の頃の本多は年中、鼻汁をたらしている「のっそりした子供」だったという。身体は大きく頑健であったが、秀才ではなく、周囲から馬鹿にされることもあるほどだった。しかし、高等小学校卒業後、帝大生だった兄を頼って上京し、大学予備門に入学して猛勉強の日々に突入していく。子供の頃からの持ち味だった「泥臭さ」は学問の習得における「粘り強さ」に転化され、以後、努力型の秀逸な研究者への道を歩み続けていった。

### 本多光太郎ファッション

和洋折衷にこうもり傘。伴う犬もファッションの一部

東北帝大の教授になった本多は、片平キャンパスからほど近い米ヶ袋という場所に住み、毎日、徒歩で大学に通っていた。その通勤時の服装は、常に決まっていた。黒無地の地味な和服&袴、靴、山高帽という和洋折衷スタイル。晴れた日でも必ずこうもり傘を持ち、本多が歩くとき、必ず愛犬がついてきた。この犬は本多の実験室巡視の際にも必ず後をついてきたという。傘も犬も含めて本多光太郎ファッションであった。



### 漢字の書き間違い

揮毫の際には漢字を書き間違えることもしばしば

本多は有名になるにつれ、色紙に揮毫を求められる機会が増えていった。この揮毫の際に時々、漢字を書き間違えた。本多が一番好んで書いた「今が大切」という一文も、「切」の字が「功」と読めてしまうものがしばしばあった。それらの色紙は今も本多記念館に保存されている。



### 教育勅語

必ず教育勅語を読み間違える総長にその場の皆が大喝采

本多総長は、式典での教育勅語奉読の際、頻繁に読み間違えた。間違えずに読み通した時には御名御璽を言い忘れる。あるいは日付を言い間違える。学生や教授たちは「総長、今日はどこを間違えるか」と楽しみにしていて、間違えると大喝采。当時は「大学総長が教育勅語を読み間違えるなど、もってのほか」のご時世だったが、「本多先生に勅語奉読の練習はさせないほうが良い。そのほうが式がおもしろくなる」と言い出す教授もいたらしい。東北帝大のおおらかさが窺える逸話である。

### 待ったが多い囲碁

長年の好敵手も怒らせる「待った」の回数

本多は東北帝大総長になったあたりから盛んに囲碁を打つようになった。好敵手は理学部数学科の窪田忠彦教授。よく窪田宅で碁を打ったが、本多の碁はやたらと「待った」が多かった。あまりに多いので、窪田は「君とはもう碁は打たん」と怒り出すこともしばしば。しかし、3日もすると何事もなかったかのように本多が窪田教授を訪ねていき、窪田も何事もなかったかのように碁を打ち興じる。「待った」も含めて本多のご愛敬であった。



熱海温泉にて友人(依国一)と碁を打つ本多

謹厳実直にして研究熱心な生き方を物語る「鉄の神様が遺した言葉」

本来、無口な性格だった本多光太郎は、東北帝国大学総長時代以後、揮毫する機会などが増えたため、数々の彼らしい言葉を残している。ここでは、それらをいくつか紹介しよう。

## 今が大切

若者の苦勞は願っても之を持って

熱 鐵は金の王なる哉

間 希望は常に雄大に

鍛 人格の完成は

鉄 自覚より始まる

角は破損の因となる。丸味をつけて破損を防げ

良書精読 味の出るまで

よい観測は正しい姿勢より産る

自分の権利と共に他人の権利を守る

## 敬愛のボンドで結べ師弟間

そうだなあ。少しは…この通りでええわなあ  
（「今度生まれてきたらどんな人生を送りたいか」と聞かれて）

無理は病の元となる

## つとめてやむな

鉄の変態にともなう巨大なる内部歪力。これを活用すればダイヤモンドが造れる（亡くなる前の最後の言葉）

産業は学問の道場なり  
心豊かに姿勢は樂に。それで勝ち得るよいデータ

## どこまでも実験を繰り返す「職人」性は卓越した研究者への道

本多光太郎はあらゆる時間を実験に注ぎ込む「実験の鬼」だった。

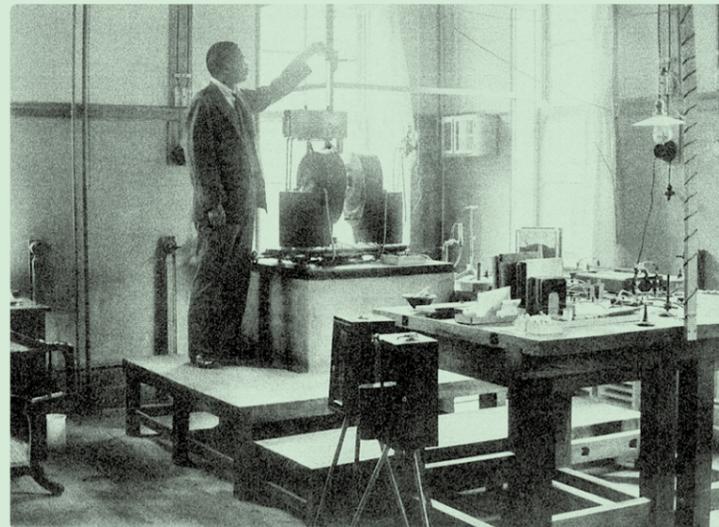
膨大な回数の実験を繰り返し、ついには望むデータを勝ち取っていく。

強烈な粘り強さを持つ「職人」性の高い研究者。その徹底ぶりを物語るいくつかの逸話が残されている。

### 東京帝大時代 ①

#### 夜中まで続く実験に守衛からクレーム

東京帝大での本多光太郎は毎日、実験に精出す日々を送った。夜中に帰宅する頃にはすでに赤門は閉まっており、毎晩、寝ている守衛を起こして門の鍵を開けてもらっていた。これに辟易した守衛は本多に「わざわざ赤門を開けなくても、ひょいと塀を乗り越えて帰っていただければ」と頼みに行った。すると本多は「毎晩すみません」と謝りながらも「人間は犬や猫とは違って門から出入りするものだと思います。ぼくはきっと日本の役に立つ仕事をしますので、泥棒のように塀を越えることはご容赦ください」と呟いた。守衛は納得し、守衛仲間「あの人は相当のものになる」と語り合ったという。



### 東京帝大時代 ②

#### 元旦も実験室へ。長岡半太郎と鉢合わせ

本多が東京帝大で師事した長岡半太郎はこんな逸話を述懐している。ある年の元旦、閃いた実験アイデアを確認したかった長岡は帝大物理学教室に出勤した。すると、赤毛布をかぶって実験を続ける本多と遭遇。思わず、「本多君、精が出るね。今日は元旦だぜ」と声をかけると、本多は「はあ、先生だって元旦です」と答えた。このやりとりで研究熱心な師弟は大笑いしたという。

### 東京帝大時代 ③

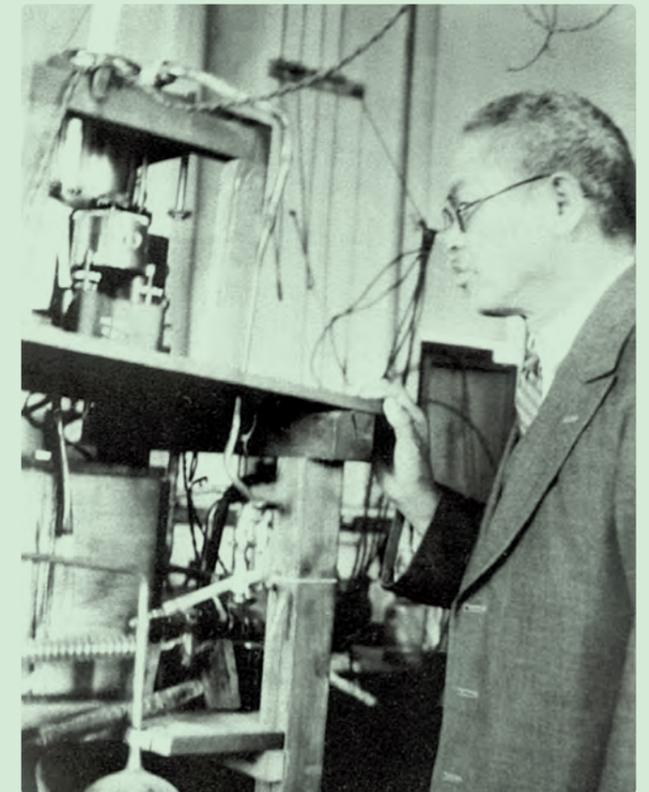
#### 後輩の寺田寅彦も驚いた本多の実験の凄さ

東京帝大で本多の後輩だった寺田寅彦（物理学者。夏目漱石『吾輩は猫である』に登場する寒月君のモデル）は、晩年、中谷宇吉郎（物理学者。雪の結晶の研究で著名）が筆録した回想談の中で「本多の実験の凄さ」について述懐している。本多は「機械の精度、装置の性質のどちらから考えても到底測れないだろう」と思われる測定実験を、どこまでも粘って繰り返すうちについては成功してしまう。そんな本多を見て、寺田は「必ずできると確信して何回でも根気よくやれば、ほとんど不可能と思われることでもついにはできるのだ」という悟りを得たという。本多には不可能を可能にする粘り強さがあったのである。

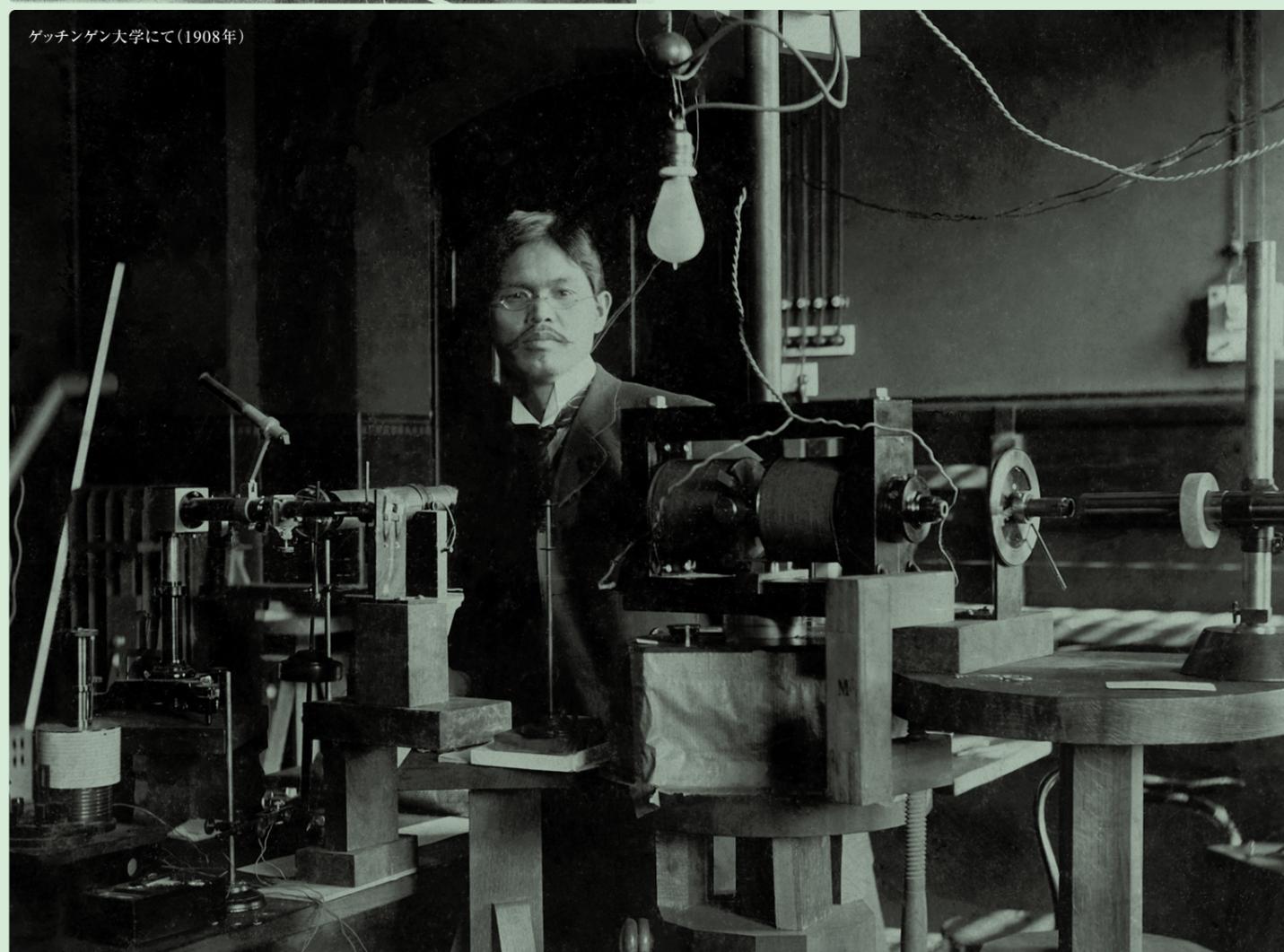
### 長岡半太郎の言葉

#### 秀才であることなど世の中では問題ではない

本多の師、長岡半太郎は、東北帝国大学の本多教授在職25周年祝賀会におけるスピーチで以下のように語っている。「本多君については正直なところ、そんなにあたまたの良い学生とは思わなかった。したがって本多君がこんなに偉い仕事をやるような人物になろうとは想像もしなかった。念々不断的努力、それが今日の本多君を築き上げたものと言わざるを得ない。本多博士を見れば、秀才であることなどは世の中では問題ではない。それよりも彼が努力できるか否か、ということの方が遥かに大きな問題であることが判る」  
（石川梯次郎著・本多光太郎伝より引用）



ゲッチンゲン大学にて(1908年)



### ゲッチンゲン時代

#### 下宿のおばさんの名言

「あの人は実験が忙しくて死ぬ暇がない」

明治40(1907)年、本多はドイツ・ゲッチンゲン大学に留学した。ある日、ベルリンに住んでいた留学生仲間・中沢亮治が「ゲッチンゲン在住の日本人が亡くなった」との噂を耳にした。「これは一大事。本多かもしれない」というわけで、中沢はゲッチンゲンに赴いた。ゲッチンゲンの本多の下宿に到着し、下宿のおばさんに「本多が亡くなったのは本当か」と聞くと、おばさんはびっくりして「ドクター・ホンダは実験が忙しすぎて死ぬ暇なんてなさそうですよ」と応答。さらに本多の現状を尋ねると、おばさんは「彼は普通のドイツ人よりもたくさん食べますね。実験が忙しくて下宿には夜9時にならないと帰って来ません」と笑いながら答えた。中沢はこれ聞いてひと安心。名刺にメッセージを書き残して、のんびりベルリンへと戻っていった。

### 数々の秀逸な研究者を世に送り出した「本多スクール」と企業への学術指導

本多はたくさんの秀逸な研究者を育てている。いわば「本多スクール」。

彼らは東北帝大のみならず、他の大学や実業界にも散開し、学術と社会に大きな影響を与えた。

また、本多は産業界への学術指導も積極的に行い、複数の企業の設立にも貢献していった。



(前列・左から)梅林、鈴木、増本、本多、菊田、石原、齋藤  
(後列・左から)須貝、畠山

#### 金研本多スクール

##### 世界の学界を驚かせた本多スクールの成果の数々

東北帝大鉄鋼研究所が金属材料研究所へと発展した頃は、本多とその門下生たちが数々の目覚ましい研究成果を生み出した時期だった。曾禰武による「気体の磁気係数の測定」、本多と大久保準三による「強磁性理論」、本多と茅誠司による「鉄、ニッケル、コバルトなどの単結晶における精密な磁気測定」、増本量と山本達治による「高透磁率粉末合金センダスト」、本多・増子正・仁科存による「スーパー・パーマロイ」、本多・増本量・白川勇記による「超音波発生用磁歪材料アルフェル」、増本量の「スーパー・インバー」。これらの成果はその後の金属工学に大きな影響を与えた。

#### 東工大の本多スクール出身者

##### 本多スクール出身者が大岡山に集結

本多の薫陶を受けた研究者のうち、東京工業大学に職を得た者は多かった。昭和4(1929)年、東京高等工業学校が東京工業大学に昇格した際に助教授として招聘された武井武を皮切りに、山田良之助、河上益夫、横山均次、岡本正三など、多数の本多スクール出身者が東工大に集結した。当時、大岡山の東工大には東北帝大工学部長から大阪帝大理学部を経て後に東工大の学長を務めた八木秀次(八木・宇田アンテナの発明者)らも含め、東北帝大出身者が多かつたらしく「東北会」も結成されていたという。

#### 学術指導と企業設立

##### 学術研究の工業化を实践する企業設立に貢献し、大阪の企業へも技術指導

本多はアカデミアでの研究者育成のみならず、企業への技術指導や企業設立にも大いに貢献している。仙台の金研の名が全国で知られるようになったことで金属工業会社から技術指導を望む声が高まり、大正末(1926年頃)から、木村鋼化工場、和泉利器製作所、浅香工業などの大阪の企業にも熱心に技術指導をしていた。その発展として、昭和7(1932)年、大阪府工業奨励館に併設された大阪府金属材料研究所の初代所長に就任した。また、「産業は学問の道場なり」の言葉を実践するように、仙台で多くの企業設立に貢献している。本多の提言によって大正14(1925)年に工業用刃

物の国産化を推進する東洋刃物が設立。昭和12(1937)年には東北特殊鋼が設立された。さらに、昭和13(1938)年に設立された東北金属工業は、本多発明のKS磁石鋼、増本量発明のセンダストなどの磁性材料を事業化するために生まれた企業であった。また、KS磁石鋼を用いた工芸品の商品化のために昭和8(1933)年の東北工芸製作所設立を支援した。本多の薫陶を受けたこれらの企業の創立者・技術者たちも、いわば「本多スクール」の一角を占める人々と言うことができよう。

#### 初期の本多スクール

##### 最初の愛弟子、曾禰武と高木弘

本多光太郎が東北帝大の教授に着任したばかりの頃の本多スクールといえば、曾禰武と高木弘が挙げられる。曾禰は一高の学生時代、東京帝大にいた本多とともに中禅寺湖の静振の実験を一緒に行った。それが縁で、本多が東北帝大の教授になった時に最初の助手となった。高木弘は七高から東京帝大理学部を経て東北帝大の大学院に進んだ。その後、臨時理化学研究所の研究補助となり、本多とともに大発明、KS磁石鋼を作り上げた。

#### 全盛期当初の本多スクール

##### 臨時理化学研究所第二部開始時の豊かな布陣

本多の研究者としての全盛期は東北帝大臨時理化学研究所第二部が開設された大正5(1916)年から約20年間だと言われている。その全盛期のスタートを彩る第二部メンバーはまさにその後の本多スクールの原型を成す布陣であった。研究主任に本多。研究補助に高木弘、石原寅次郎、清水武雄、村上武次郎(後の2代目金研所長)。研究助手に今野清兵衛、菊田多利男、小山民造、谷地森七郎、亘理直毅、曾禰武、高柳大助。囑託に俵国一。金属工学における最強チームが作られつつあった。



右看板に「東北帝大総長本多光太郎先生御発明 KS磁石鋼応用品製作発売元」

# 歴史の中の本多光太郎

初山高仁



物理学は19世紀に大きく発展した。この発展を促した大きな要因の一つが産業技術である。特に鉄鋼が大量に生産されるようになったことは、社会の仕組みを大きく変えた。生産された鋼が社会の中で広く使われることになったというだけでなく、使用される鉄鋼の性質を詳しく研究する必要が生まれたのである。この必要に対して応えて見せたのが本多光太郎である。

大学が研究の場であるということは現在では常識である。しかし、20世紀初頭の日本では東京と京都の2つの帝国大学がありはしたが、これらでは大学が研究の場所だとは見なされていなかったところがある。こうした状況で1911年に新たに開設された東北帝国大学理科大学では大学の役割として研究が重視され、研究能力のある新進気鋭の者たちが教授陣として据えられた。この一人が本多光太郎である。

20世紀に入った頃には欧米では研究所の設立が相次いでいた。少人数による研究では産業目的には対応できなくなっていたともいえる。こうした欧米での研究の状況を踏まえて本多が作り上げたのが金属材料研究所（金研）なのである。金研の誕生は欧米の研究者からも称賛されるものであった。

金研で本多が熱心な教育を行っていたことは今日まで語り継がれている。本多の教え子たちが大きな成果を残したことなどから金研は「本多スクール」とも呼ばれるようになった。東北大学の理念の一つとして「研究第一主義」というものがあるが、その意味するところは最先端の研究に基づいた教育を行うということである。本多の教育姿勢は東北大学の「研究第一主義」の原点の一つとも言えるものだった。物理学の教科書を執筆したことなどからも本多の教育への熱意を感じることができる。

日本金属学会の本部は現在でも仙台にある。全国規模の学会本部が東京や京阪神地域以外にあるのは極めて珍しい。それほどに本多と金研が日本の金属学研究に影響をもっていたからである。かつて金属の研究を志した学生たちは本多による指導を受けるべく仙台を目指したのであった。金研にある本多の銅像は、先達の志を引き継いで仙台に集う多くの若者たちを、今も見守り続けている。

初山高仁  
科学史家、東北大学非常勤講師  
著書に『鉄の科学史—科学と産業のあゆみ—』（東北大学出版会）がある。

## 本多光太郎 年譜

明治3(1870)年2月23日	愛知県碧海郡矢作町(現・愛知県岡崎市)にて本多兵三郎(農業)三男として出生
明治30(1897)年7月10日	東京帝国大学理科大学物理学卒業
明治44(1911)年2月22日	東北帝国大学理科大学教授就任
大正5(1916)年4月1日	臨時理化学研究所第2部を学内に新設し研究主任となる
大正5(1916)年	KS磁石鋼を発明
大正8(1919)年5月22日	東北帝国大学に附属鉄鋼研究所を設置し初代所長となる
大正11(1922)年8月9日	鉄鋼研究所を金属材料研究所に改組し大学に附置された研究所とする
昭和6(1931)年6月15日	東北帝国大学総長に就任(～昭和15(1940)年5月30日)
昭和8(1933)年	新KS磁石鋼を発明
昭和12(1937)年2月14日	社団法人日本金属学会を創立 初代会長となる
昭和12(1937)年4月28日	第1回文化勲章を受章
昭和15(1940)年7月31日	東北帝国大学名誉教授
昭和24(1949)年4月1日	東京理科大学学長に就任
昭和29(1954)年2月12日	東京にて逝去(84才) 勲一等旭日大綬章を受章 岡崎市妙源寺に埋葬
昭和32(1957)年11月22日	財団法人本多記念会設立



Director	前川禎通(公益財団法人本多記念会 理事長) 高梨弘毅(東北大学金属材料研究所 所長)
Adviser	小林典男(公益財団法人本多記念会 理事 東北大学名誉教授) 佐々木孝彦(東北大学金属材料研究所 教授)
Coordinator	富松美沙(東北大学金属材料研究所)
Editor/Writer	清水 修(ACADEMIC GROOVE MOVEMENT)
Designer	古田雅美(opportune design Inc.)
Illustrator	MIKITAKAKO Illustration (所属・役職はいずれも初版発行当時)

## 公益財団法人 本多記念会



公益財団法人本多記念会は、わが国物理冶金学の創始者として世界的名声を勝ち得た故本多光太郎の学徳を永く顕彰することを目的として設立された記念財団です。

### 主な事業の概要

[本多記念賞(昭和34年度～)]  
理工学、特に金属及びその周辺材料に関する研究を行い、科学文化の進展に卓抜な貢献をした者に贈呈。

[本多フロンティア賞(平成16年度～)]  
理工学、特に金属及びその周辺材料に関する研究を行い、学術面あるいは技術面において画期的な発見又は発明を行った者に贈呈。

[本多記念研究奨励賞(昭和55年度～)]  
理工学、特に金属及びその周辺材料に関する研究を行い、優れた研究成果、または発明を行った者で、将来の発展を期待できる若い研究者に贈呈。

[原田研究奨励賞(平成16年度～)]  
金属及びその周辺材料に関する研究、教育を行い、優れた成果、教育的貢献が顕著な東北地区の若い研究者に授与。

[日本金属学会本多記念支部講演会の開催(昭和63年度～)]  
日本金属学会の8支部での講演会の開催において、毎年1回本多記念支部講演会を依頼し、この開催への助成。

### お問い合わせ

〒980-8577 仙台市青葉区片平二丁目1-1  
東北大学金属材料研究所内 公益財団法人 本多記念会  
TEL: 022-215-2868 / E-mail: hondakinenkai0223@gmail.com  
<http://hondakinenkai.or.jp/>

制作発行 公益財団法人本多記念会  
東北大学金属材料研究所  
発行 2020年2月23日 初版発行(本多光太郎博士生誕150周年記念)  
2024年2月23日 2版発行

出典 [本多光太郎伝]石川梯次郎 著(1964)  
[本多光太郎—マテリアルサイエンスの先駆者]本多記念会 監修、平林真 編集(2004)



公益財団法人 本多記念会  
<http://hondakinenkai.or.jp/>

東北大学金属材料研究所  
<http://www.imr.tohoku.ac.jp/>